
シンポジウム 6

小児陰嚢疾患の坂と雲～その隙間に垣間見れる明るい未来？

座 長 白 石 晃 司（山口大学大学院医学系研究科 泌尿器科学講座）
野 口 満（佐賀大学医学部 泌尿器科学講座）

司会のことば

小児期の陰嚢疾患に焦点をあて、4名の先生方にご講演いただきました。

東武先生（佐賀大学）には、現在ほぼ完成しつつある停留精巣ガイドラインの内容で、精巣の自然下降、組織学的変化、将来的な精液所見や悪性化など浮彫りになった課題についてコンパクトにまとめていただきました。海外のガイドラインに追従するのではなく、我が国の実情にあった改訂作業についても言及され、ガイドラインの出版を待ち遠しく感じずにはいられませんでした。

秋武先生（福岡市立こども病院）には精巣固定術のtipsについてご講演いただきました。小児泌尿器科をサブスペシャリティーとしない先生方におかれましても、精巣固定術は泌尿器科の基本手術の1つであり、施行される機会も多いと思います。会場の先生方の熱気を感じ、手術手技に関するディスカッションにおきましては細かな内容まで言及されることも多く、泌尿器科医はやはり泌尿器外科医である現状を目の当たりにしました。

杉原先生（愛媛大学）には急性陰嚢症、主に精巣捻転についてご講演いただきました。TWIST スコアは頭で

はわかっている、いざ急患に遭遇した際にはつつい調べてしまうことも多いと思います。現在のスコアの点数配分は妥当とは思われません。愛媛大学での多数例をもとに、どの症状が診断に重要か、また補助検査としての超音波検査の有用性と限界について、わかりやすくレビューされました。

浜辺先生（山口大学）には小児期の精索静脈瘤のマネジメントについて自施設の経験に基づきご講演いただきました。小児期～思春期における精索静脈瘤の手術適応については議論があるものの、エビデンスの蓄積により将来的な妊孕性についてその有用性を示す報告が増えています。臨床的に問題となるのは手術時年齢であり、20歳時の精巣容積をエンドポイントとした場合に、遅くとも中学生～高校1年生までの手術が有用であることを示されました。精液所見を加味したさらなるフォローアップデータが楽しみです。

今回の小児泌尿器科のテーマ「小児陰嚢疾患の坂と雲～その隙間に垣間見れる明るい未来？」でした。ご参加された先生方におかれましては、とても明るい光が坂と雲の向こうに見ることができたと確信しております。